

ハバクク書 3章 1-6、17-19 節

コリントの信徒への手紙一 2章 1-11 節

マタイによる福音書 5章 13-20 節

先週から福音書は、マタイによる福音書にある山上の説教の箇所（5章～7章）です。山上の説教の内容は、イエス様の教えとして有名ですが、マルコによる福音書にはありません。また、ルカによる福音書にも類似する教えがありますが、マタイによる福音書のものとは内容的に少し異なっており、場面が山の上（山上）ではありません。そこから、これらの教えのどの部分が真実のイエス様の言葉か、そのような問いが生まれます。しかし、大切なのは、この福音書が想定している読者の受け止め方であり、現在のわたしたちがどのように受け止めるかということです。

さて、本日の福音書箇所は、二つに分けられます。一つは「塩と光」を題材とした、「地の塩、世の光」としてのキリスト者のあり方について、もう一つは、律法の完成についての教えです。

まず「塩と光」の「塩」から考えてみますと、「塩」は、イエス様の時代も今も、人間が何かを食べて生きるために、あるいはその他の様々な生活に欠かせない物質です。イエス様は、弟子たちをその塩に譬えて語ります。「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである」（マタイ 5・13）

ここでは塩にとって最も大切なことは、塩味であるという当たり前のことが語られています。理由は、塩に見えても塩の味をほとんど持たない物質があるからです。それではキリスト者の塩味とは何でしょうか。必ず思い浮かぶことは、祈ること、『聖書』を学ぶこと、礼拝を捧げることです。それは、最初に、この言葉を受けたマタイによる福音書の読者たちもわたしたちも変わりません。しかし、イエス様があえて塩を題材として教えたということは、それだけではなかったと思います。それは、塩は解けて初めて塩味が出るからです。つまり、先ほどの祈り、学び、礼拝だけではなく、キリスト者が他者と交わることの大切さです。

それでは、マタイによる福音書が想定している読者たちが、その交わりをどのように具体化していたのでしょうか。もし、マタイによる福音書が、それを読む読者たちつまり教会に、その交わりをローマ帝国・社会の中で実践することを意図していた、また教会もそのように受け止めていたというのであれば、現在のわたしたちにとってもそれが模範となりわかりやすいのですが、残念ながらそのような歴史はありません。もちろん当時の教会がまったく社会の出来事に全く無関心であったとは思えませんが、ローマ帝国を改革する、ローマ帝国に奉仕する、そのような意味で、教会は、これらの教えや交わりを受け止めていなかったと思います。教会の信仰がローマ帝国の国教になった

とき、状況が変わりますが、それはイエス様の教えが各個人の信仰に関係なく、社会の一般的美徳のようなものとして受け止められたという変化です。

それでは、そのような変化を遂げるまで、これらの教えや交わりは、どこで実践されることが想定され、また実践されていたのかというと、それは教会の中にほかなりません。ローマ帝国という格差がある社会の中で、教会は、『聖書』の示す主なる神様の愛と正義を、学び、祈るだけではなく、自分たちの交わりを通して実践していたのです。その歩みは、すぐに社会の改革につながらなかったとしても、まことの人と人との関係とは何か、そして、まことの神様と人との関係とは何か、それを示すものでした。だから多くの人の信頼を得たのだと思います。また、そのことは、次の光に関するイエス様の言葉に表れています。

「あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。～～そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである」(マタイ 5:15～16)。隠れることができないほど、すばらしい光を放つような交わりを形成すること、それが教会の務めであり、現代のわたしたちもその使命を負っています。そのような共同体として光り輝くことを通して、世界に救いを示すことが今も大切なのです。そして、そのために十字架と復活において主なる神様の愛を示されたイエス様を信じることが大切なのですが、イエス様は、律法の大切さも強調しています。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」(マタイ 5:17)。ここでイエス様が教えておられるのは、律法の根本にある愛を実践すること、つまり律法以上のことを考え実践することです。それは、まさにイエス様の活動に表れた事柄でした。

パウロは、イエス様の生涯を知りません。しかし、その十字架と復活に主なる神様の意思・愛が示され、その愛に律法を完成する大切な事柄があることを悟りました。「兄弟たち、わたしもそちらに行ったとき、神の秘められた計画を宣べ伝えるのに優れた言葉や知恵を用いませんでした。」(一コリ 2:1)ここに「神の秘められた計画」とあります。新しい訳では「神の秘儀、別訳：神秘」です。直訳すれば、「神の秘密」ですが、単なる秘密ではありません。主なる神様が、天地創造の初めからすべての被造物を愛しておられることは、『聖書』に明白であり変わらない事柄であるからです。パウロが「秘密」ととらえたのは、イエス様の十字架と復活を通して、言い換えれば新しく歩み始めた教会を通して、改めてそのことに気がついたからでした。

この主なる神様の愛を、イエス様の十字架と復活を通して知っている教会は、二千年近い歩みを持ち、また世界中に数多くあります。しかし、それらの教会は今もバラバラのままです。それは本当に悲しいことですが、だからこそわたしたち聖公会という教会があります。いつの日か、どの教会も地の塩として歩み、世の光として輝くために、わたしたちは、わたしたちに主なる神様が与えて下さった教会を、これからも大切にしたいと思います。